

17-8 授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：社会

単元（教材）：「江戸幕府と政治の安定」

対象：小学校六年生

授業者：諏訪宏志

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○本授業は、一般的に「鎖国」と呼ばれる時代の日本史を扱う授業を通じて、周辺世界から閉ざされていた日本、という通説的な理解（誤解）を正すと同時に、新しい歴史像を提示することに成功している。そこで示された歴史像は、日本史という枠組みを超えて、グローバル化という広い文脈に即したものであり、本カリキュラムの基本構想を体現した授業といえる。

○本授業では、グローバル化が、近年に始まったことではなく長い歴史過程として捉えられている。具体的には、主にアジア内で交易がされていた第一期、そうした交易がヨーロッパやアメリカとつながり始める第二期、そして19世紀以降の技術加速とともにグローバルな文物の交流が一気に加速する第三期である。授業者がこうした明確で巨視的な全体像を持ったうえで、本授業はそのなかの第二期という位置づけで進められた。

○授業では、子どもの主体性が重視され、学習活動は子供たちが疑問を解決するかたちで進められた。その際に特徴的だったのは、当時の日本と世界で交易された物に「さわる」ことが重視され、児童が実際に歴史に触れる機会が設けられたことである。

○同じく強みとして特筆に値するのは地域へのまなざしである。実際にさわれるモノ、という対象を拡張するかたちで、自分たちが住む身近な地域への視点が設けられ、そうした地域と世界が、本授業で対象とした近世からつながりを持っていたことが、伏見の歴史という文脈で効果的に示されていた。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○前述の本授業は当カリキュラムのモデルケースといえる。それを前提としたうえで、今後の発展形を模索するうえで足がかりとなりうる題材等を以下に挙げる。

○一般的に海は外界との接触を阻害するものとされがちだが、近年の歴史学では、前近代における陸路の未発達等を考慮し、海がむしろ諸地域間をつなぎ、物流を促進した側面が強調されている。こうした点について、手軽な概説として、福井憲彦「グローバルな歴史の捉え方」同著『歴史学入門』、67～75頁が挙げられる。

○本授業では矢羽や絹織物など「モノ」が教材として効果的に用いられていた。他に（実

物を教材として用意するのは困難だが）子供の関心を引きつつグローバル化の歴史にアプローチするうえで効果的な「モノ」として、銀、サツマイモ、タバコ、鉄砲などがある。これらの題材については岸本美緒『東アジアの「近世」』という小冊子（山川世界史リブレット）がわかりやすく解説を加えている。